月刊
名大文学部
第139号
隔月刊行

山の人生を記録～ニホンミツバチの養蜂調査の話～

人文学専攻超域人文学繋・民俗学

私はモチ（行事食）とハチ（養蜂）の民俗学的研究をしている。ニホンミツバチとの出会いは、長野県伊那谷の山里にあった。2011 年に狩猟の調査で伊那谷に向かう途中、訪花中のミツバチの姿が目に映った。山道を進むと、くり抜かれた丸太と寝転がっている心材を発見した。ニホンミツバチの巣箱作りに使うのだと聞き、好奇心をくすぐられた。

後に伊那谷が長野県下の最大のニホンミツバチの飼育地であり、「3 つのニホンミツバチ文化圏」が存在する先行研究[1)]を知り、この地に蓄積された養蜂の民俗知への興味が深まった。2017 年に総合地球環境学研究所の仲間と養蜂の実態調査を始め、2024 年現在までに伊那谷の 2 市 3 町 5 村の趣味養蜂家 36 名からニホンミツバチの飼育を聞き取り、民俗誌映像「ニホンミツバチとともに生きる～長野県伊那谷における伝統養蜂調査の 30 年間～」[2)]を制作し公開した。

この映像は 1990 年代に現地調査をした高校教諭の方の協力のもと、村の養蜂家の姿を記録し、名人親子が百年かけて続ける飼育方法の探究など、30 年間の変化を追っている。温暖化等で自然環境が変化する中、ニホンミツバチの養蜂も外来生物のアカリンダニや獣害といった新たな問題に直面している。ハチが「いて当たり前のようなもの」から「尊い存在」になったと、伝統を生かしつつ、対策を模索中の飼育者（養蜂歴 72 年、90 代）が語っているように、村の方の自然に対する敬意、ハチを大切に思う気持ちが養蜂技術の工夫につながることを感慨深く思っている。

映像公開後に一人の飼育者から「私の 90 年の人生にこのようなご褒美を頂き人生の 1 頁に記される物」という、お便りを頂いた時は、何より感激もひとしおだった。この方は 12 年前に狩猟の調査にも協力してくれた方で、本当に嬉しい再会とお言葉だった。私の研究は未知なるものと、人々の心に出会う旅である。大きな歴史からこぼれ落ちる無名の人々の暮らしの記録でもある。

1）参考文献：岩崎靖、井原道夫（1994）「伊那谷のニホンミツバチ」『ミツバチ科学』15（1），pp.7-18.
2）映像のリンクと QR コード：
https://www.youtube.com/watch?v=-gHg179nJbY

甘靖超　准教授

様々な巣箱の併用（大鹿村、2022）

日本の学生が選ぶゴンクール賞

フランス語フランス文学

今年で第 3 回目の開催となる「日本の学生が選ぶゴンクール賞」は、フランスの現代作家に授与される「ゴンクール賞」候補作品を学生が読み、1 位の作品を決定する取り組みです。全国の学生が地区ごとのブロックに分かれて審査を行い、地区代表による最終選考を経て決定された受賞作は日本語訳が出版されます。中部地区では、名大フランス語フランス文学分野専攻を始めとした様々な分野専攻，学部・研究科また他大学の学生が選考委員として参加しました。

今回の候補作は 4 作品。基本は各地区の先生方が作ってくださるシノプシス（日本語の作品概要）をもとに読み進めますが、原文の雰囲気を味わいたい人は、先生や他の学生との勉強会を通してフランス語で読むこともできます。各作品に数回ずつ設けた意見交換会では、単純な感想に加え、歴史、文体、美術など、分野の異なる学生から独自の意見が飛び交い、大いに盛り上がりました。

最終選考会では、高校生から大学院生という幅広い歳の代表者総勢 10 名が東京に集いました。地区ごとの意見だけではなく、一選考委員として感じた作品の魅力を述べあい、実に白熱した議論が行われました。

その結果、今回の受賞作品はジャン＝バティスト・アンドレア（Jean-Baptiste Andrea）の『彼女を見守る』（Veiller sur elle）に決定しました。障害を持った彫刻家である主人公の半生を描いた作品ですが、幾重にも張り巡らされた伏線が読者の期待を裏切りながら回収されていく様は圧巻で、読み始めるとページを繰る手が止まらない疾走感溢れる作品です。タイトルの『彼女（elle）』とは何なのか。読めばきっと、予想外の結末に感嘆のため息を漏らすこと間違いなしです！邦訳が出たら、是非手に取ってみて下さい。

小泉理子　博士前期課程 2 年
渡邉菜月　博士前期課程 2 年

最終選考会のセレモニーの様子

日本語を「言語化」してみる

日本語学

昨今、「言語化」という言葉をよく目にするようになりました。「説明が難しい / 整理されていない事象に新しく説明を与える」といった意味のようです。つまるところ、「言語化」とは「説明文化」に近いようにも思えます。

「言語化」は日本語研究の本分でもあります。日本語話者にとって、自らが用いている（用いていた）語の意味・文法・文字は、何となく理解できる、気にも留めない事象かもしれません。しかしその感覚的な運用には少なからずルールがあり、いずれの研究もそれを明らかにすることに主眼が置かれています。文献に当たってルールを導き出すのも、既存のルールから外れた用例をもとに新しいルールを提案するのも、日本語の研究であり「言語化」であると言ってよいでしょう。

日本語学研究室では、演習を通して研究テーマ設定や課題解決方法の模索を行っています。在籍生は学部生から博士後期課程の院生まで幅広く、世代やテーマを超えた研究・議論の場が開かれています。日本語全体を包み込むようなテーマから些細な言い間違いまで、研究室ではすべてが研究の端緒となりますから、目に入った看板・教科書の端・友達との LINE や DM… そんなところにも、研究への門が隠れているかもしれません。

「言語化」が流行った背景には、加速度的に変化する社会とそこに理解が及ばない故の、説明に対する渇望があると邪推しますが、恋心や桜の美しさを音数の制限下で「言語化」していた日本語話者は、その重要性をすでに十分知っているでしょう。心情や景色が言い尽くせないように、身近な言葉も言い尽くせない不思議であふれています。そんな日本語の世界を切り取って、少しでも自分のものにしてみませんか？

山口碧天　博士前期課程 2 年

誰かが淹れたコーヒーの残り香がする日本語学研究室。演習の多くはここで行います。空きコマは研究の場兼憩いの場と化し、たまに先生をお呼びして一緒にケーキやドーナツを頂くことも。

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2024 年 5 月 10 日発行